

講演「四国におけるカジノ創設の動き」 ～カジノを活用した健康保養社会～

〈講演のポイント〉

・「カジノ健康保養都市」システムとは、風景が安定し生活に潤いをもたらす隠れ里のような環境を持続的にもたらすことを目的とし、環境の維持財源の部分負担をカジノ収益の還元で賄うものである。環境には、ホテル、レストラン、商店街、大学、病院などが相補的につながって、住民の快適性と利便性が保障され、誇りを持って住める街である。

・精神科医として患者の社会復帰のため、イギリスの治療共同社会の実践地であるケンブリッジのフルボーン病院、温泉治療場であるドイツのバーデン・バーデン等を訪問し、人が安全、快適で持続的に住める場を考えてきた。そのモデルとして、バーデン・バーデンの温泉保養地のカジノ収益を地域の持続的安定に活用しているシステムが、今後の日本社会に必要であると考えている。

・日本は、街並み整備に関し、税制の問題も含めて継承しづらいシステムとなっており、これを改めないと資産は更に劣化していく。きれいな街並みで、癒しを真剣に考えていくのであれば、カジノ収益の活用をはじめ、これを守る制度と財源について検討しなければならない。

・競輪、競馬、パチンコは町おこしの要素に成り得ていないし、巨額の収益システムであるテーマパークもその地域生活の活性化に貢献しているとは思えない。ラスベガス型、ドイツ型をはじめ、どういった型のカジノを選択し、その収益をどう還元していくのか我々の中で具体的にイメージし、地域の人たち、関係者に理解を求めることで、より地域に適したカジノを創設することができる。



徳島カジノ研究会発起人、医師
中西昭憲氏

ご紹介いただきました中西です。精神科の医者がどうしてカジノかと不思議に思われているかもしれません。私は大学を卒業して、精神科医を選びましたが、一時、やめようとも思いました。精神科には、まるで収容所のような病院があったからです。

当時、早稲田大学の相場教授の「イギリスに於ける治療共同社会」という精神医学の講義に興味を持ち、ケンブリッジのフルボーン病院で研修しました。そこで改めて精神医学を志し、この学問にかけようと思ったのです。

日本では、治療共同社会という概念がなく、精神科の取り扱いも経済的環境や患者と共に生きる治療的環境を調べていく過程で温泉療法に遭遇し、ドイツのバーデン・バーデンの「保養都市構想」にたどり着きました。

なお、この過程で、日米終戦50周年記念行事で厚木基地と関係を持ち、スカイホーク【写真1】が手に入りました。スクランプにされるのはもったいないので、譲り受けた次第です。

さらに、阪神・淡路大震災の「5回忌・ネパール砂曼茶羅供養」の際、僧侶招聘責任者を引き受けた関係で、クリニックのホールで約2m四方の砂曼茶羅【写真2】が製作されました。

クリニックの庭の一角には、流政之氏の「海の峠」【写真3】や嫌な夢をよい夢に変える「夢



【写真1】クリニックの庭にあるスカイホーク



【写真2】完成した砂曼陀羅



【写真3】流政之氏の石の彫刻（海の峰）

違い地蔵】【写真4】があり、環境のもつ治療力を整備しています。

温泉療法の施設として、香川県は津田、愛媛県は今治にケアハウスがあります。そしてリゾ



【写真4】夢違い地蔵

ート法がもてはやされていた頃、私も徳島の土成町にこれをつくろうとしたことがありました。計画の途中で、突然、行政から規制がかかって梯子を外された格好になり、結局諦めざるを得ませんでした。

しかし、現時点において全国のケアハウスの9割以上が赤字です。国が考え、民間が運営して、それでも赤字になるケアハウスとは一体何なのだろうと考え、ケアハウス発祥の地ドイツへ見学に行きました。ドイツにおけるケアハウスとは、コンサートホール、レストラン、そしてカジノが入っている建物であって、温泉施設そのものは、ケアハウスではなく、ケアミッテルハウスと呼びます。どうも言葉を取り違えて日本に持ってきたようで、人が行かないところばかりに多額の投資をしてケアハウスなるものを造ったためにほとんどの施設が赤字という状況です。

バーデン・バーデンではカジノ収益の一部がケアハウスに使われており、こういう仕組みがあるのなら、日本でも患者さんと共に生活する治療共同社会が実現できるのではないかと考えています。

依存症は、アルコール依存症、買い物依存症など様々で、ご家族が困り果てて、私のところによく相談に来られます。パチンコ依存症の治療は大変難しいのですが、これが黙殺され、カ

ジノに対してのみ依存症が指摘されることは、日本特有の不思議な現象です。

日本でカジノが創設され、どう運用されるかは、地域の人達の考え方次第ですが、カジノを大別するとラスベガス型のビッグカジノと、私がご紹介するスマールカジノがあります。バーデン・バーデンという人口5万人の街にどんなカジノが存在するのかをお話していきたいと思います。

カジノを取り巻く環境

ドイツの道路傍にあるゴミ箱【写真5】には、一番下に日本語で「ゴミ」と明記しています。世界中の人々が訪れるので、日本語でも書いてあり、このゴミ箱にみる優しさと配慮は、今後、四国の観光を考えていく時にも大事なことだと思います。



【写真5】ドイツの道路傍にあるゴミ箱

バーデン・バーデンでは、カジノの看板はなく、公園を取り囲む建物の中にひっそりと存在しており、街並みが落ち着いていて何だかホッとしています。

ここにカジノが創設されたのは1838年で、バーデン公の許可によるものです。バーデン・バ

ーデンの街並みを健康と保養に重点をおいたものにしようとしたのは1952年で、以降、約50年の年月を要しています。

一方、インディアンの居留地におけるカジノでも、500ぐらいのベッド数があるホテルを併設しており、インディアン地域の収入が増えて、生活水準が向上しています。カジノ収益が街づくりや福祉・教育の財源として還元され、土地を買い戻すことができて、インディアンの誇りを取り戻しているようです。

私が現在の徳島空港拡張計画の際、県の空港周辺対策委員を務めていた関係で、カジノホテルをつくって、その収益で公園を維持管理していくこうと提案したこともあります。一例を挙げれば、イルカ療法は自閉症患者の治療に有効なのですが、イルカを飼育管理する資金を捻出できないことには、いい治療もできません。残念ながらさぬき市ではイルカ療法をやめる方向だと聞いています。自閉症者が全て自己負担するのは無理だし、保険でこれを賄うのも困難です。数万人程度の小さな町で、どの様な形態のカジノを取り入れたらうまくいくのか思案しているところです。

モンテカルロのカジノ・デ・モンテカルロ【写真6】では、夜になるとフェラーリやロールスロイスが多く集まります。カジノのすぐ裏に、テルメ・マリン・モンテカルロという



【写真6】モンテカルロのカジノ

委員会



【写真7】タラサテラピーのベランダ

海洋療法の施設があり、マッサージなど全てのサービスを含めても、8,000円程度で済みます。建物から、モンテカルロの海岸も一望でき、タラサテラピーのベランダ【写真7】もあります。

中に入ると、水中エアロマッサージもあり、くつろぐことができます。私が訪れたのは11月ですが、施設のバルコニーは結構暖かくて、皆さん裸で楽しんでいました。

海岸は人工で、小豆大の砂が敷かれています。港の中では、年配の女性が1人で泳いでいました。現地の人達は自立心が強く、自分の時間を過ごすことが上手です。

【図17】カジノとパチンコのイメージ比較

| | カジノ | パチンコ | 記事 |
|-----------|---------|----------|---|
| 喧 嘩 さ | 無 | 有 | ③ P269 |
| バー・食事 | 有 | 無 | 場内に設置、又は隣接 |
| 礼儀・マナー | 有 | 無 | ネクタイの着用 場内が静寂 |
| 社 交 性 | 有 | 無 | 集会に利用 |
| 治 安 | 安 全 | 不 安 | ① P44 |
| 透明性・税収 | 有・良 | 疑 問 | ① P80 |
| 町 の 美 化 | 有 | 無 | 収益の使用 |
| 芸 術 ・ 文 化 | 有 | 無 | ⑤ P131 展示品・歴史的建物 |
| 街 の 複 合 性 | 有 | 無 | ⑥ P108 ③ P287 |
| 使 用 金 額 | 約7,000円 | 20,000円弱 | ① P38 |
| 規 模 | 小規模 | 小規模 | ③ P268 |
| 依 存 性 | 対策有り | 無 | ① P71 使用金額の制限 身分証の提示 行動様式のチェック |

※カジノは主にバーデン・バーデンを想定。
記事覧の数字は参考文献のページ数を示す。

(参考文献)

- | | | | |
|-----------------------|------------|---------|-------|
| ①カジノ新ビジネスが日本を救う | 室伏哲郎著 | 史輝出版 | 2002年 |
| ②カジノ産業が日本を救う | 室伏哲郎著 | 日本カジノ学会 | 2001年 |
| ③ギャンブルの社会学 | 谷岡一郎・仲村祥一編 | 世界思想社 | 1997年 |
| ④ギャンブルフィーヴァー依存症と合法化論争 | 谷岡一郎著 | 中公新書 | 1996年 |
| ⑤西洋温泉事情 | 池内紀著編 | 鹿島出版 | 1989年 |
| ⑥ヨーロッパの温泉保養地 | オット・グラウス著 | 集文社 | 1987年 |
| ⑦21世紀の海洋開発 | 近藤健雄著 | 清文社 | 1994年 |

モンテカルロには、有名な水族館をはじめ、様々な要素があり、ここに世界中から人が集まって来るのも特徴です。水族館にはバスカーフが展示してあり、そこから街の中まで、周遊バスや列車で行くことができます。そしてカジノやレストランでは、様々な人たちがそれぞれの集い方で楽しんでいます。

レジュメ【図17】の中にカジノとパチンコのイメージ比較があり、その中に参考文献1~7と記載しています。記事のところに番号をふっていますので、参考文献のこのページ数を見れば、これらが掲載されています。

海洋リゾートに行くと、海水浴、日光浴をするのは勿論、市内、名所旧跡の見学、ドライブ、食事、買い物をして、夜になるとディスコ、食事で楽しめます。海洋リゾートだからといって、水泳ばかりではありません。

これと同様、クアハウスに行っても、朝から晩まで温泉につかっているわけではありません。少し空いた時間に、あれこれ見たいという要素がないと退屈してしまいます。海水浴は、1日のうちせいぜい3時間程度のもので、他の人たちはそれぞれ好きな場所に行っているわけで、バーデン・バーデンもモンテカルロも、こうした要素をたくさん備えています。

バーデン・バーデンの特徴

バーデン・バーデンでは、1952年に温泉保養客、会議客、レクリエーション客の3本柱で保養都市を目指す決定がなされ、自然を人間の健康に利用しながら街並み整備を進めています。

【写真8】

日本で言うクアハウスのフリードリッヒ浴場を中心に飲泉場、公園があり、周囲には、ホテル、劇場、美術館をはじめ、ミニゴルフ場からテニスまで、あらゆるものが揃っています。

バーデン・バーデンは、人口5万人の街ですが、1991年の統計で年間宿泊者が28万人、延90



【写真8】バーデン・バーデンの保養施設の分布

万人にのぼります。その内訳はクアゲスト、いわゆるコンサートホールなどに来る人が20%、会議・セールス客が20%、保養・レクリエーションが60%となっています。そして、日帰りのお客様は、年間数百万人と言われており、1日に直せば、ほぼ1万人が域外から入ってきていることになります。

全く気質の違う人たちが来た時の安全対策はどうするのかということが問題になりますが、バーデン・バーデンで見る限り、そういった不安は一切感じませんでした。ここを訪れる主な理由は、交通の便がよく、清潔で治安が保たれ、ホテルのレベルが高く、いろいろなスポーツができるということです。オペラ、カジノ、博物館や優雅な商店街があり、見本市、講演会や学会などの催し物が年余を通じて開催されています。住む人、訪れる人の感性を豊かにし、この地を愛するもろもろの要素をもたらす資金の一翼をカジノが担っていると言っても過言ではありません。

91年時点におけるバーデン・バーデンでのカジノの総売上は8,000万マルクですから、その当時、約60円/マルクとして、50億円のお金が入ってきます。一旦、州の会計に入った後、2,300



【写真9】リヒテンターラアレー（光の小道）



【写真10】バーデン・バーデンのクアハウス
(右側の建物)



【写真11】クアハウスの前の公園から市街地への入口

万マルク（約14億円）程度が、コンサートホール、入浴施設などに還元されています。そして建物自身もカジノ運営のために賃貸ししていますから、別途、3,500万マルク程度の収入となり、クアハウス、クアミッテルハウスや地域美化のための入件費等に使われています。

バーデン・バーデンのホテルの横は木立に囲まれたりヒテンターラアレー（光の小道）という散歩道【写真9】で2kmぐらい続いており、往復で4km、1時間程度です。公園を挟んでクアハウス【写真10】があり、カジノやレストラン、コンサートホールがあります。公園を抜けると市街地【写真11】で、ゴルフ場、美術館もありますから、時間的に余裕を持って休養をとることができます。

他のところも同様だと思いますが、10年間のうちに再訪問すると、入場料が無料になります。ですから、7年ぶりに行った際、「以前来たことがありますか」と聞かれたので、「確か来ました」と答えると、パスポートを調査し、以前来たことが分かることワンドリンク付きのチップを2枚くれました。何となく嬉しくなり持って帰ってきました。そういうホスピタリティ（見ず知らずの人に対する思いやり）があり、楽しませてくれます。

バーデン・バーデンのこの建物は1800年代につくられています。日本では固定資産税が高く、地震や火事があったりして、建物をつくっては壊しの繰り返しで、財産がほとんど蓄積されていません。石と木の文化の差でしょうか。

京都、奈良では、街並みが保存されてはいますが、利便性が優先されて、街並みは変わっていきます。そこで、ベローナのように旧市街と新市街を分けて、旧市街はそのまま残したらどうでしょうか。固定資産税をかけるのも止めて、住民は新市街に住み、その代わり旧市街は観光収入で保存整備すればよいのです。ベローナに行くと、ロミオとジュリエットのバルコニーがあって、その地の歴史に触れることができるの

ですが、日本では意外とこういったことが少ないのです。

レストランは大理石の建物で一種の美術館ですが、トリンクハレ（飲水館）では、温泉療法にまつわる様々な出来事を壁画にしており、温泉水を朝と夕方に1杯ずつ飲んで治療にあたるといった、のんびりした治療体系があります。温泉療法の許可を受ければ、3週間ぐらい国から治療費が支給され、企業からも同期間の休暇が与えられます。そして温泉療法医から症状に応じて指示が出され、自己負担金を払えば、より充実した施設やサービスを利用することもできます。3週間という余裕のあるスケジュールで治療が進んでいきますから、医療的にも有効で楽しいことだと思います。

クアハウス周辺にはレストラン、ショッピングセンターがあり、途中に様々な広告が掲出されています。EC諸国の有名店の広告塔があり、それを散歩しながら見て楽しむのです。そして帰りにフランクフルトの飛行場で、広告にあったものを買って帰ることになります。四国でも八十八カ所で各県のお土産屋の瀟洒な広告塔があつてもいいと思います。歩いていて、次にどこへ行ったら、「こんなものがあるんだ！」という楽しみをあまり与えてくれないところに、日本観光地のソフトの欠陥があるのではないかという印象を受けます。

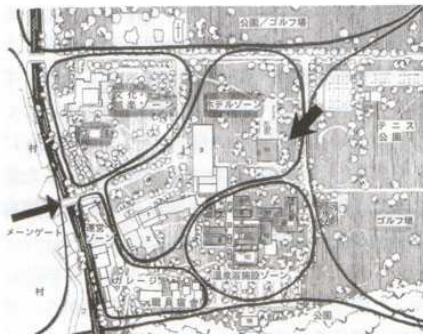
バーデン・バーデンには車道もありますが、車の乗り入れは禁止になっており、郊外に自家用車を駐車してバスで入ってきます。このような不自由な生活を強いても、街の人からクレームがでないのは、素晴らしいことだと思います。

一方、日本は、地方都市の中心市街地で閑古鳥が鳴いています。固定資産税の問題も含め、継承しづらいシステムをつくってしまっており、これを改めないと日本の資産は更に劣化していきます。

バーデン・バーデンのクアハウスの利用料金は200~300円で、温泉療法地のため、流水プー

ルもあります。しかし、日本で第三セクターやグリーンピアの運営形態を見ると無駄が多く、維持管理費が捻出できないということになりかねません。バーデン・バーデンでもカジノの収益なしで採算をとるのは困難です。

スイスのバード・ラガツ保養センターの全体計画【写真12】を見ると、カジノを取り囲むように、テニス公園、ゴルフ場、ゴルフ場公園、文化・娯楽ゾーン、店舗があり、10ヘクタール以上という広大な敷地の中で、生活者が共存しているのです。



【写真12】スイスのバート・ガルツ保養センターの全体計画図一No16がカジノ・バー(ヨーロッパの温泉保養地 オットー・グラウス著 集英社1987)

カジノ創設と地域活性化

カジノは地域活性化にどう貢献していくのでしょうか。ディズニーランドができる、その収益が地元に還元されているという話は聞きません。確かに銀行、国税庁には入るでしょうが、結局、一企業が儲かっているに過ぎません。テーマパークは各地にありますが、いずれも自己完結型で、なぜそこに住んでいる人たちと共に存共栄できないのかというのが、私の疑問です。

カジノ収益の一部を依存症対策に充てることになりますが、カジノだけではなく、アルコール、買い物への依存症もあります。そういう人たちも、患者さんで来院されます。極端に切

委員会

り詰めた生活で、うつ病になることが多いのですが、借金のため、入院もままなりません。薬を出しますが、自殺願望が強く、もし入院できないんだったら、お金のことは気にしないで、駆け込み寺として当医院へ来なさいとアドバイスしています。そして時折、子連れで入院します。お母さんが入院すると子供が可哀想で、一緒に入院して、看護師が子供の面倒を見ています。全くのボランティアですが、それでもどこかに駆け込み寺的なものがなければならないのです。

地域全体が駆け込み寺となることを考え、10年ぐらい前から、町役場に公園、公共施設、それを取り囲む遊歩道を健康街道として整備していくことを提案しています。毎年、500m 延ばしていくけば10年で5km、往復路だから10kmになります。これができれば、日々散歩をした結果、徳島県の松茂町が10年後に最も生活習慣病の負担が少ない町になるかもしれません。

30年前にケンブリッジのフルボーン病院に行った際、デービッド・クラーク先生から、精神科の環境を向上したいなら、政治家になりなさいと言われました。多くの予算をとってきて、精神科の環境、もしくはその地域の環境に予算を振り向けることのできる人になりなさいということです。

クラーク氏は、フルボーンという人口42万人の小さな町にある病院の院長ですが、WHOの顧問も務めており、町の隅々まで熟知していました。日本でも街並みをつくる際、息の長い計画を見守っていかないと、街並みはどんどん劣化していきます。カジノが創設され、中心市街地が賑わって固定資産税が上がれば、儲けの少ない住民は、郊外へ出て行かざるを得ないので、それを守ってあげなければなりません。

私の病院の土地は約5,000坪あるのですが、そのうち2,000坪ぐらいは、20数年間、木や花を植え続けてきました。土地を購入した昭和37、8年の固定資産税は安く、1坪100円程度

でしたが、今は町の評価で坪20万円もするので、固定資産税が大きな負担になっています。緑をつくり、酸素を増やして、環境に貢献しているという自負がありましたが、固定資産税にはかないません。収益を生まないので、銀行からは売却か有効利用すべきだというアドバイスを受けています。日本が、きれいな街並みで、癒しを真剣に考えていくのであれば、これを守る制度と財源が是非必要です。

ベトナムにもカジノがあります。ここは電子カジノですから、ディーラーとのやりとりはできず、無味乾燥な雰囲気で、すぐに出てきました。コロニアル様式のコンチネンタルホテルやマジェスティックホテル内にディーラーの居るカジノができれば行きたいものです。のめり込むのはいけませんが、カジノのちょっとした緊張感が、ストレスを取り除いてくれます。

カジノといえば、皆さんはラスベガスなどのビッグカジノを思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、地方には地方なりのカジノの取り入れ方があり、本日の講演会場ぐらいの広さがあれば、十分取り組み可能です。

日本にカジノが創設されれば、何千億円もの資金を投下して、結局外国資本に売却してしまった九州のシーガイア関係者は悔しがることになるでしょう。もう少し待てば、日本人資本のカジノ場としてシーガイアが活躍できた可能性は高いのです。

精神科の医者として、精神障害者の出ないことが理想ですが、出た場合にどういう形で社会で吸収するのかが重要です。吸収することによって、医療費や社会保障費も軽減します。私は患者さんに、草抜きしてくれたら、些少のお礼と昼飯、風呂を出すからと声をかけています。応じる人は少ないので、前述した駆け込み寺のようなところがあつてもいいと思うのです。

イタリアにはトリエステという街があって、そこでは精神障害の患者さんが、うまく融合しながら生活しています。私が見たフルボーン病

院は、掲示板に子守り1ポンド/日、薪割り50シリングといったアルバイト求人が掲出されており、それを患者さんが見て、自由に応募しています。

おわりに

カジノ健康保養都市構想は、温泉、病院、公園（健康街道）、商店街、スポーツ施設が相互に魅力を高め合うシステムです。地域の持つ魅力的な要素を組み合わせ、目的を持った街づくりの要として、カジノの収益の利用はギャンブルの持つ負のイメージを払拭する力になると考えております。

どういった型のカジノを選択するかは、今後、皆さん方の中で具体的にイメージされ、地域の人たち、関係者に理解を求ることで、より地域に適したカジノが生まれると考えています。

ご聴聽ありがとうございました。



【質疑応答】

司会 会員の皆様から事前に質問を承っておりますので、まずこれについてご回答いただければと思います。

まず、四国でカジノを活用した健康保養社会を提唱されている中西様にお伺いいたします。

（質問1） 高齢化社会を迎え、四国での地域活性化のあり方として健康保養社会を目指すという方向性は、違和感なく受け入れることができ、お遍路さんに代表される「癒しの文化」にもマッチするもので、非常に魅力的な発想だと思われます。ただ、そこにカジノの要素を付加させる必然性がどの程度あるのでしょうか？

大都市と比べ、比較的治安がよく、安心して暮らせるのが現在の四国の長所ですが、これらの四国のイメージを損なう懸念とそうなった際の代償は大きいと考えられます。この点いかがでしょうか。

中西 癒しの中になぜカジノが有効かというと、環境整備に非常に役立つからです。ドイツでは、医療費の一部にカジノ収益金を役立てており、街並み自身が優しい感じを受けます。バーデン・バーデンが安全で清潔さが保たれているのは、こういった財源を活用しているからです。きれいになるとゴミを捨てる人も少なくなり、住人が街に誇りを持てるようになります。

高松では、例えば香川大学医学部と提携して、東京から2泊3日で人間ドックを受診しに来た人に対し、CTを撮るのは午後2時からなので、午前中空いた時間にゴルフをしよう、採血は翌日の午前8時からなので、夜は食事の後、カジノに行こうといった特殊な人間ドックを実施す

委員会

れば、観光プラス健康管理が可能です。東京で慌ただしく受診するよりは、地方に行って、その文化に触れてという形で、カジノがもたらしてくれる財源は、非常に大事になると思います。

それから、カジノには常に負のイメージもつきまといます。犯罪が増える、依存症になるといたことですが、ラスベガスでも犯罪率は大幅に減っています。カジノで勝っても犯罪に巻き込まれたら、顧客は二度と来てくれません。ですから、防犯管理には、相当のコストをかけています。

どういうモデルとするか検討を重ね、計画が具体化するにつれ、意外と負のイメージはなくなり、逆に四国4県の癒しの街並み、お遍路さんを含めた様々なリピート客が来てくれるのではないかと予想しています。

司会 引き続き、美原様にお伺いいたします。

(質問2) カジノ成功の大きな要素は、通常の観光客だけではなく、地域のリピータをいかに取り込めるかにかかっているように思います。そうした点で考えると一定以上の消費人口を域内または後背地に持つことが前提になると思われますが、それはどの程度の規模と考えられますか。また、全国的にみて、四国はカジノ創設に適している地域と言えるのでしょうか。



美原 経済規模、施設規模をどう考えたらよいのかというご質問だと思います。施設規模を決めるのはポジション数、つまりスロットマシーンとテーブルを何台置くか決めた瞬間に、入れる人数が定まってしまいます。スロットマシーンは1人1台、ルーレットは10人、トランプは4人程度

です。何台置くかということでキャパシティ、施設規模が決まることがあります。

四国は人口規模が大きくないことを心配されているようですが、もう少しマーケットを見て考える必要があります。例えばこの街に来る顧客を倍に増やすことを目標として、そのうち遊興施設に来る人の割合を考えれば、ほぼ予想ができます。曜日、年齢層、職種などから絶対顧客数を考えて、その街の適切な施設規模を検討しなければなりません。例えば、収益規模が小さなカジノでも、健全、安全であり、地域にフィットしたものであれば、事業としてうまく行くでしょう。最終的には、そのマーケットに合った施設規模を考えればよいのです。

私は、四国にある日突然、ラスベガスが出来るとは思いません。四国の地域にフィットしたカジノ施設の形態があるはずです。皆さん自分で地域のカジノについてご検討いただければ、自ずと正解が見出せるのではないかと考えています。



中西 平成15年8月に石川県珠洲市でカジノサミットが開催された際、珠洲市の人からも「ここにカジノをつくるって大丈夫ですか」という質問がありました。珠洲市にはパチンコ店が2軒あり、うまく経営できているので、小規模なカジノであれば、当然やっていけるだろうとお答えしました。私が住んでいる徳島でもパチンコ店はたくさんあり、繁盛しています。したがって、徳島に小規模カジノが数軒あっても全く問題はないと思います。

一方、大規模カジノを創設することになれば、徳島城址も含め、街並み全体に配慮した地域経済の核になるでしょう。

(質問3) カジノを運営する場合、観光客をはじめとする域外からの誘客を基本としなければ、地元の人がお金を使ったのではあまり意味がないと思うのです。地元の人のお金が地域振興に使われたのでは、税金として徴収されているのと同じです。バーデン・バーデンの例にもあるように、有名な温泉地など、ある程度の人を集める仕組みが既にあって、訪れた人がカジノを利用することでさらにお金が落ちるというパターンが地方での基本的なカジノのあり方ではないかと思うのです。

そうしますと、カジノ自体で観光客を呼ぶための大規模なものではなく、観光地の街づくりと一緒にとなった施設をつくるのが四国のイメージに合っているのではないですか。

美原 それは適切な考え方です。基本的にエンターテイメント施設は、賭博行為というより、時間消費を楽しむものになりますから、代替的な消費もあり得ます。ヨーロッパ諸国が為政者にカジノがある理由を訪ねると、これは1つの要素に過ぎないという答えでした。様々な観光資源の中で、プラスアルファがあると人が来てくれるし、地域住民とも交流することになります。みんなで楽しんで、その結果として儲かっ

たり損をしたり、税金を払ったりしているのです。ヨーロッパの為政者は、まず賭博行為ありきで、カジノだけで人を呼びうとは考えていません。多様な地域の魅力をアピールし、どうやって観光客を増やすかという大きな戦略にカジノをうまく位置付けていくという方針です。

一方、ラスベガスは、ディスティネーション・リゾート、つまり、そこに行くこと自体が目的となるリゾートになります。明確な目的があつて顧客を呼び寄せるディスティネーション・リゾートもあれば、ヨーロッパのように、街そのものが持つ観光の魅力や資源を活かし、これらをうまく複合化させることによって、活性化を図っているケースもあります。

ですから、ホテルなどを併設している理由は、顧客に長期間滞在して欲しいからです。人が動けば必ずお金が動いて、地域に経済効果が出てきます。この様にカジノを中核要素として捉えながら、街づくりを考えるのがヨーロッパのやり方です。ぜひとも、地域の皆さんで、何が最適なのか、議論していただきたいのです。

中西 パチンコ屋に行っていた地元の人がカジノに来てリピーターとなり、その収益が地域に還元されるのは、結構なことだと思います。海外で開催される学会などでは、その街のカジノの有無によって、集まり具合が違うのです。学会で重要なところだけを聞いて、その後観光に行ってみようという人達も多く、こういった要素は重要です。そして維持管理していくなければなりませんから、地元の人が6割ぐらい来てくれた方が、安全面でも好都合であり、どういう形で取り込んでいくかが今後の課題です。

(質問4) 日本はカジノという言葉に忌避傾向があると思うのです。しかし、カジノのない日本でも治安は悪化しており、特に少年犯罪などはすごい勢いで増えているということを考えれば、そろそろ本音でカジノによる地域活性化に

委員会

について議論していく時代になったのではないかと思った次第です。

韓国にもカジノができたとのことですが、世界の先進国でカジノのない国はあるのでしょうか。アメリカは州独自で法律をつくることのできる国ですが、全ての州にカジノがあるわけではないようです。それと日本では、東京都、大阪府、石川県、その他に熱心な県はどこでしょうか。カジノを創設するなら、最初が一番いいと思うのです。ご紹介のあったバーデン・バーデンは素晴らしい街のようで、大きなカジノではないようですが、どういったことにカジノの収益金を活用し、どの程度地域に寄与しているのでしょうか。

美原 先進国でカジノのない国は日本だけになりました。アジアの途上国でも、次々と創設されています。米国では州政府に委ねられており、カジノのない州は、ユタとハワイの2つだけです。ユタはモルモン教徒の州であり、宗教的な観点から認められていません。ハワイでは、住民運動や議会での投票が既に何度も実施されており、創設は時間の問題だと思います。

アメリカの場合、もう1つ特別な法体系があります。IGRA（イグラ）と呼ばれており、アメリカ原住民ゲーミング法と呼ばれる法が連邦法で成立しているのです。これは国が委員会を設けて管理する法律で、米国の原住民であるインディアン部族の教育、福祉等を支えるため、連邦政府がカジノの施行権を部族に与えています。インディアン部族は、ファーストネーションと呼ばれ、居留地は州政府の管轄下ではなく、別の国のような扱いになっており、インディアンカジノと呼ばれています。

しかしながら、インディアンカジノと通常のカジノに違いはほとんどありません。ボストンから1時間ぐらいのところに、フォックスウッドと呼ばれる世界最大のカジノがあります。森の中に巨大な街ができているので、こう呼ばれ

ており、インディアン部族が管理しています。しかし経営者は、ヒルトンホテルのゲーミング・ディビジョンの白人に委託しています。

この様に世界には、様々なシステム、規制のモデルがあります。60年代から80年代にかけて米国のモデルが精緻化され、ヨーロッパでもフランス、ドイツ、オーストリアで20世紀の初頭に整備した賭博法体系の見直しが検討されています。

日本は昭和20年代に公営賭博をつくって以降、細かい規制は増えましたが、抜本的な見直しは行われていません。日本も社会の現実を見て、その1つの要素にカジノが入っても何らおかしくない時代になってきているという気がします。

中西 ドイツのカジノが、どの程度、地域に収益を還元しているかということに関して、詳細な数字までは分かりませんが、バーデン・バーデンでの年間の売り上げが約50億円で、その4分の1が、施設の運営費に回されています。クアハウスの中にカジノを借りていますから、賃貸料も含まれており、総額で36億円ぐらいの資金が、治療施設と公園等に使われているようです。

ヨーロッパのカジノは、それほど儲けを考えておらず、こういった仕組みの中で、街並みが保全されているのです。ただ、ヨーロッパでもアメリカのようなビッグカジノをつくろうという動きはあるようです。

司会 時間もまいりましたので、以上を持ちまして、本日の観光委員会「カジノ創設の可能性」を終了させていただきたいと存じます。

長時間にわたり熱心にご聴講いただき、誠にありがとうございました。

(文責：八木)